

佛蘭西革命と奈破崙（第四回）

高田 友

（13）

一八〇四年、奈破崙、羅馬教皇を招きて皇帝登極の大禮を行ひたり。如何に皇帝といへども身は羅馬へ赴かずして教皇を呼びつけたるはその始末前古未曾有の瀆神の行^{わざ}と言はでや已みぬべき。剩へ、教皇の戴冠せむとするを拒み、手に受けて自ら頭^みに置きたりとは。さは「此の帝冠は我が手にて勝ち取りたるに外ならず」と宣言したるなり。且は如世嬪の頭に我が手より皇后の戴冠を爲したるに及びては其の大膽不敵洵に言語に絶すとは斯の如きを謂ふならむ。

雖然、この即位は己が恣意にて皇帝たらむと宣言したるにあらず、國民投票にて賛否を問へるなり。賛成票幾百萬に達したるに、反對は一萬に足らず。已哉、今も昔も、ポピュリズムの顛末此の如し。茲に「第一帝政」開闢せられたり。

風雲急を告ぐる佛蘭西政局の行く所を見て、歐羅巴各國にては愈々奈破崙政權を覆滅せむと朝野志を一にするに至る。

英國にては、平和派（奈破崙宥和派）敗れ、抗戦派小ピットの再任せられて印綬を帶ぶ。

一八〇五年、第三回對佛大同盟結成せらる。

奈破崙は英國を仇敵と見做し、年内に（一八〇五）ドーバー海峡を渡りて侵攻せむと企て、十月には、虎春川沖（被澁樽海峡の外）の海戦に臨みたるが、寢孫率ゐる英國艦隊の爲に、佛蘭西・西班牙聯合軍は撃滅せられたり。西班牙國王は奈破崙の兄「酔ひどれホセ」なりき。「ホセ」は Joseph (Jose) の西班牙讀みなり。

言ふに及ばず、海軍の脆弱なりしは、奈破崙陸の將軍なれば指揮する能はざりしがゆゑなり。陸戦にては皇帝親しく出陣して大勝に繼ぐ大勝。此の年十二月には逢棄津の「三帝會戦」（奈破崙一世、フランツ一世、アレキサンドル一世）にて、奧太利・露西亞の聯合軍を敗走せしむ。

（14）

伊太利・阿蘭陀屈服し、奧太利も奈破崙麾下ぞ入りんぬる。

於是、奈破崙は、獨逸のうち、南獨逸と萊茵右岸の十六の小國（邦・藩國）を纏めて「萊茵同盟」を結成せしむ。これに由りて、神聖羅馬帝國千年の榮華は邯鄲の夢とこそは消えたりけれ（一八〇六）。

加之、普魯西を破り、一八〇七年恫喝もて「ティルジット條約」に調印せしめたり。かく

て普魯西は國土の半ばを割讓せしめられ、その地にウェストファリア（植洲鳥羽倆）王國、華沙（惡澤）大公國の誕生を見る。賠償金・軍備制限など苛酷なる條件を課したれば、普魯西の奈破崙に怨念を抱くや豈異とするに足らざらむ。

かつて神聖羅馬帝國に屬したりし佛蘭西周邊の地域は、佛蘭西本土に併合せらる。白耳義ルクセンブルグ、壽府、萊茵左岸などは佛蘭西の行政單位とぞ化したりける。

大陸諸國は佛蘭西の同盟國となる。阿蘭陀（華沙（惡澤）大公國）然り、普魯西は内に鬱々たるものあれどまた然り。

而して、一八〇九年、皇后の如世嬪（庶民出身／子連れにて奈破崙と再婚）を離縁して、翌年奧太利の皇女マリー・ルイーゼを皇后に冊立す。マリア・テレジアの曾孫なり。

（15）

然而、なほ抵抗鎮まらざるは英吉利なりき。

一八〇六年、奈破崙、「大陸封鎖令」を發す。即ち大陸諸國に令して、英國と交易するを悉皆禁止せり。英吉利を牽制せむとの意に出づるは言ふに及ばねど、また以て佛蘭西產業界の市場を擴大せむとは圖りたるなり。

思ひきや、奈破崙、畢生の大業とて歐羅巴全土を服從せしめむと欲したるが却りて己が身の破滅を招かむとは。大陸封鎖令に據りて進退窮まつたるは佛蘭西なりき。露西亞・普魯西・奧太利杯の諸國は、英吉利より工業製品を輸入し、以て國民生活を支へてありしかば、何條奈破崙の無理難題に服從するをうべき。加之、かかる國々にとりては、英吉利は穀物の輸出市場にして、これを切りてはいかんが經濟の立ち行くを得む。つひに奈破崙の目を盗み、國を擧げて密貿易に勵むに至る。

而して、さなきだに佛蘭西の強權に鬱屈する諸國なるに、自由平等の理念、刻々と全歐羅巴を蠶食す。皮肉なるかな、佛蘭西革命に據る革命思想の世を席捲したるがゆゑならずや。

特筆すべきは普魯西。奈破崙に支配せられてより、佛蘭西に倣ひて進歩的なる改革に着手す。農奴解放、軍制改革を斷行し、近代國家へ向ひて一步を踏み出したるなり。哲學者フイヒテは「獨逸國民に告ぐ」と題する講演を行ひて愛國心を鼓舞したりき。

西班牙にては奈破崙の兄國王に据ゑられたれば、國民の反感いやが上にも昂騰するものあり。一八〇八年、窗折戸にて反佛騷擾を起義すといへども忽ちに彈壓せらる。然れどもパルチザンの暗躍已まずして、「半島戰爭」と稱せらるるに到る。

（令和七年五月十五日受附）